

## 2.1 行動中心主義

行動中心主義では、使用者ならびに学習者を課題 (task) を達成することを求められている社会に生きる社会的な存在として捉える。彼らがその課題を達成しようとするとき、言語的なコミュニケーションを使うことも1つの方略である。また、そういったコミュニケーション能力以外にも、一般的な知識や技能が課題の遂行に際し用いられる。そこでCEFRが共通枠組みをつくるにあたって、社会の成員である彼らが、課題を遂行するときに用いる個々人が所有する特有の技術や認知的、感情的、意志的資質も併せて様々な視点から考慮することが行動中心主義的な考え方である。

### 2.1.1 個人の一般的能力

言語学習、使用に必要となる一般的能力というのは「知識」、「技術」、「実存的能力」、「学習能力」に分けられる。第1のものには個々人の体験に基づく「体験的知識」、公教育によって得られる「学問的知識」の双方がある。言語学習においては、言語的知識とそれ以外の知識が同時に、また関係し合いながら増加し、増強されるので、上記の2つの知識を包括して、目標言語の学習に役立ててねばならない。第2のものは、実際に目的とする行為を実行する能力のことで、練習期間を通して「意識的」な活動を繰り返し行うことで、「意識しなくても良い」知識(技能)を獲得することを目指す。第3のものは個人の性格、人格的特色、事物に対する姿勢・態度を総合したものである。これは多様な文化的適応がもたらした面が多くあると考えられるため、入れ替えの効かない個人的性格に由来するものだと単純に言い切れないのである。言語学習においては、母語以外の言語を学ぶこと、あるいはその言語を用いたコミュニケーションを通して、言語使用や異文化間のコミュニケーションに対する姿勢や態度が変化することが期待される。第4のものは「他者(新しもの、違ったもの)を発見したいと思い、かつその方法を知っている」状態のことで、先述したものが複雑に絡み合うことで形成される。この能力は公的教育を修了した後に、新しい言語を学び続ける自律的な学習者に必要なもので、CEFRでその育成を重視している。

### 2.1.2 コミュニケーション言語能力

基本的に「言語構造的能力」、「社会言語能力」、「言語運用能力」に分かれ、それぞれの能力がコミュニケーション言語能力を構成している。第1のものは、主に「語彙、音韻、統語、形態、意味」に関する知識と技能や知的組織力、そういった知識がいかにして蓄積され、引き出され使われるかに関するものである。第2のものは慣習など、社会文化的な条件下での言語使用と関連する。第3のものは言語素材を使うときの機能面に関する能力を言い、談話を構成したり皮肉、パロディを理解する能力とも関連し、文化的な環境に影響を受ける。

### 2.1.3 言語活動

「受容的言語活動」、「産出的言語活動」、「言葉のやりとり」、「仲介活動(通訳、翻訳など)」の4種に分けることができ、言語を使用するも学習するものも、上記のような多種の言語活動の実行に各々の言語コミュニケーション能力が現れるのである。また、どの言語活動タイプも書き、話し言葉のテキストに関連する場合があり、なおかつ双方を含むテキストと関連する場合もある。言語学習において、学習者は多様な言語活動体験を持つことが望ましく、上記のような言語活動を通してコミュニケーションをとるのに必要な能力を獲得する。上記の言語活動タイプにおいて、前半2つのものは言葉のやりとりには必須であるので、基本的なものであると言える。第3のものは、少なくとも2人の個人が言葉のやりとりをし、コミュニケーションにおいて中枢的

役割を担っているとされるため、言語学習及び言語使用の中で大きな重要性が通常認められる。産出的活動と受容的活動が交互に行われ、口頭のコミュニケーションの場合には重なって同時に行われる場合もある。第4のものは、ある理由で直接対話する力のないもの同士の間を取持ち、コミュニケーションを可能にするものである。既存のテキストの再構成を行う言語活動で、通常の言語活動の中でも重要な位置を占めている。

#### **2.1.4 言語活動の領域**

言語活動は人間の活動の諸領域のなかで、それぞれの状況下においておこなわれる。言語学習に焦点を当てて考えると「公的領域」、「私的領域」、「教育領域」、「職業領域」の大きく4つに分けることができる。第1のものは社会交渉のような社会的文脈と結びつく活動全てを指す。これと相補的な関係にあるのが家族内や友人間の関係に結びつく第2のものである。第3のものは学校などの活動に結びつき、第4のものは職業、専門的仕事に関連する。

#### **2.1.5 課題 (task)、方略 (strategies)、テキスト (texts)**

コミュニケーションと学習は様々な課題の達成を含み、その達成のために適切な方略を選択する必要性が生じる。しかし、この課題の達成において必ずしも言語活動が要求されるというわけではなく、むしろ要求される場合は課題のうちの一部でしかない。また、その時に使用される方略も言語以外の活動に関するものかもしれない、つまり、言語活動なしに課題を遂行する場合もあるのだ。

言語活動が必要となる場合（言語学習）には口頭の、あるいは書き言葉のテキストを作る必要がある。さらに学習者が必要な情報を得るために、様々なテキスト処理を行う必要を生じさせ、いかにして方略を用いるかを学習させる必要がある。しかし、それには方略と課題とテキストの間関係は課題の性質に左右されること、言語活動を通して達成される課題を明確にし、何のためにその言語活動を行うかあきらかにすることを考慮に入れなければならない。